

クリミア半島の7つのピラミッドに関する考察

ロシア・プーチン政権によって、ウクライナ領から実質上ロシア領に編入されたクリミア半島。その半島に、世界最古の世界最古のピラミッド7基が存在するということが考古学者・地球物理学者たちによって確認されているにもかかわらず、支配力のあるメディアは、これに関する報道を抑制している。2014年春からの緊迫するウクライナ情勢の背後に、この知られざる7つのピラミッドの秘密あるいは利権をめぐる争奪戦も潜んでいるのだろうか、勘ぐる見方もWEB上に昨今多くみかけられる。

クリミア半島の南西部、ヘルソネス岬からサリチ岬にかけての黒海沿岸に近接して、直線状に7つ並んだピラミッド(図1参照)。その起源は、約一万年前にさかのぼるといふ。2002年7月。ロシアの研究者たちはセバストポリ(当時は名実ともにウクライナ領)の地球物理学者、Vitaly Gokh(ヴイタリ・ゴフ)准教授のチームと合流し、地中に隠れたピラミッドNo3(北西端のぴあミッドから数えて3つめ)の探査・調査を行った。その調査の調査結果に基づいて、以下議論していく。

<http://tainy.net/5506-pyramidy-kryma.html>

<http://www.vitaly-gokh.narod.ru/gokhe1.htm>

まず、図2と3に示したのが、このNo3地中ピラミッドとスフィンクスの寸法測定結果、および、堆積物の化学分析結果だ。酸化アルミニウムと酸化第一銅から成る層、そしてまた一つ、粘土と硫酸第一鉄から成る層が発見された。そして、このピラミッドの持つ驚くべき事実も発見されたのだ。それは、ピラミッド全体が自分自身でエネルギーを発生・放出し、星々(カノープス、ベガ、カペラ)とエネルギーを送受信しあうという機能だ。

そのエネルギー粒子・波動の発生メカニズムは、水晶(石英)の層と珪酸質石膏の接触電位差によるものなのであろう(図4参照)。この今も続くエネルギー放出に身体を曝したことにより、研究者たちの健康状態には好ましい効果があったと報告されている。今後2160年間はエネルギー放出を続けていくと考えられている。

ゴフ准教授らの仮説によれば、クリミア半島のピラミッドは、地球上に分布する他の

ピラミッド(オーストラリアからイースター島まで)と共振しながら、これら3つの恒星(ベガ、カペラ、カノープス)とエネルギーのやり取りを行っているという(図5参照)。

そのピラミッド群のある場所として、オーストラリア、チベット、クリミア半島、英国、

エジプト、北西アフリカ、南西アフリカ、南東アフリカ、バミューダ、メキシコ、ブラジル、イースター島を挙げている。グラハム・ハンコックの説によれば、Ring of brodgar (リング・オブ・ブロッガー・スコットランドの環状列石) が、英国のピラミッドに該当するとい
<http://www.grahamhancock.com/phorum/read.php?f=1&i=211532&t=211532>

わが日本のピラミッド(例えば、酒井勝軍が発見したそのような)は、これらの一連のピラミッドの中には含まれていない。しかしながら、ゴフ准教授は、そのレポートの中で、日本の神社の鳥居との関連を指摘している。

さて、rainy.net と vitaly.gokh.narod.ru/ に記載された上述の内容に対して、さらに筆者によって考察を加え、新たな仮説の提示、論証の展開を行っていきたい。

(1)酸化アルミニウムと酸化第一銅から成る層について

筆者は、東日本大震災(2011年3月11日)の後、しばらく電力供給が不安定な時期が続いた時に、各家庭がこのような非常時にいかにしてエネルギーを自給すべきか、解決策について考えていた。ソーラー、風力(および補完する蓄電設備)、プロパンガスボンベ等を配備していた家庭は、困らなかったであろうが、より構造がシンプルで故障した際もユーザーが容易に補修できる、異種金属の電位差を電気エネルギーに転換するシステムを構想し、その検証を試みた。その結果、アルミニウム板と銅板を交互に直列に配置して何層もの積層体とし、アルミニウム板と銅板の間には、塩水を浸み込ませたティッシュペーパーはさんでおくと、LED 電球やラジオを駆動させるに足りる十分な電力が得られた。積層体の規模を大きくすれば、電力消費が大きい他の様々な機器を駆動できる。

<http://blogs.yahoo.co.jp/iberlekeu1/11542744.html>

この電池を長く使うと、アルミニウム表面、銅表面は酸化され、やがて発電性能は低下してくる。そうなった時は、酸化された金属表面を研磨し、新品のティッシュペーパー(薄い保水力のある絶縁体シートなら、何でもいいであろう)に塩水を吸収させて積層体を再構築すれば、発電性能は回復する。

クリミア半島の地下ピラミッド内に見つかった、酸化アルミニウムと酸化第一銅から成る層は、以上に示したような簡易な発電システムが長期間運転して金属が酸化しつくした結果、そこに残った酸化物の残渣ではなからうか?というのが筆者の仮説である。ゴフ准教授のウェブ記事を読むと、地球中心のコアで核融合反応が常時起こっており、そこからエネルギーを取り出せる可能性が示唆されている。従って、このピラミッド No.3 において、金

属アルミニウム・金属銅の電位差を利用する発電は、補助的なエネルギー源であったと考えられることもできる。もちろん、以上の仮説は、このピラミッドが建設された時代に、地球上にアルミニウムや銅の精錬技術が存在していた、あるいは、ETが地球外からアルミニウムと銅をクリミア半島に持ち込んだという前提に基づいて成立する。

(2) クリミア半島では7基のピラミッドが発見済み。未発見は5基か？

ゴフ准教授の研究・仮説の詳細が記載されたウェブサイト vitaly-gokh.narod.ru/ の中で、ゴフ氏は、3つの恒星（ベガ、カペラ、カノープス）とピラミッドとのエネルギー相互作用は計算によって得られた結論だとしている (According to the mathematical calculation)。また、地球上におけるピラミッドの総数は144000であり (12 X 12 x 1000) 、144基の基幹ピラミッドが配下の1000基の小ピラミッドを統括しているということだ。この12というマジックナンバーは、占星術の12宮、1年の12か月、12使徒、DNAの12重らせん構造に呼応している。

このゴフ氏の説に筆者が付け加える仮説を述べる。図5に示されたオーストラリアからイースター島にかけて分布したピラミッドが最上位の階層にある12基のピラミッドになる。とすれば、図1に表示された、クリミア半島で発見済みの地上・地中7基のピラミッドに加えて、未発見の5基のピラミッドが存在するはずである。NO3のピラミッドがクリミア半島における基幹ピラミッドであり、他の11基はNO3の支配下にあるわけだ。その残された未発見の5基に関する思惑も、クリミア半島の領有をめぐるロシアとウクライナ共和国・NATO側との対立の背景にあるのではないかと推測される。

(3) 3つの恒星（ベガ、カペラ、カノープス）とピラミッドとの共鳴 (resonance)

ベガ（こと座アルファ。織姫星）とカペラ（ぎょしゃ座アルファ）は、日本でもおなじみの星である。カノープス（りゅうこつ座アルファ。南極老人星とも呼ばれる）は、南日本から水平線すれすれに観測される星であり、今ひとつなじみのない星と言えるかもしれない。Wikimediaによれば、ベガ、カペラ、カノープスの天球における位置は次の通り。

ベガ… 赤経18H36M 赤緯プラス38度47分

カペラ… 赤経5H16M 赤緯プラス45度59分

カノープス… 赤経6H23M 赤緯マイナス52度41分

カペラとカノープスの赤経は、ほぼ6Hであるから、ベガの赤経約18Hに対して経度で

180度（反対側）に位置していることがわかる。

次に、ヴィタリ・ゴフ准教授が挙げた12の基幹ピラミッドのうち、特に重要な3基（チベット、イースター島、クリミア半島）の地球上における位置は次のようになる。

チベット（代表としてラサ）…北緯29度39分 東経91度1分

イースター島…南緯27度7分 西経109度22分

クリミア半島（代表としてセバストポリ）北緯44度36分 東経33度31分

チベットとイースター島の経度差は、109プラス91＝200度であり、180度に近く、また、緯度は北緯29度、南緯27度と対称的であることから、この2地点は地球上のほぼ対極に位置していることがわかる。

約12000年後に地球の歳差運動によって、ベガが北極星、カノープスが南極星となることが予測されている。3つの恒星（ベガ、カペラ、カノープス）の天球での位置（立体角）を、地球上の3基の基幹ピラミッドの位置にあてはめてみると、チベットとイースター島は対極をなしているわけだから、チベットをベガに、イースター島をカノープスに対応させることができる、では、カペラは、クリミア半島のピラミッドに対応するのだろうか？実はそうではない。前掲のベガ、カペラ、カノープスの位置関係を今一度考察してみると、カペラとカノープスの赤経はほぼ同じで、赤緯は97度（約90度）離れているわけだから、球の切り口の半円（分度器の形状）で位置を表現しようとすれば、角度0度のところにベガ、180度のところにカノープスがいて、90度のところにカペラが位置していることがわかる。もし、チベット（ラサ）から出発して地球表面上を移動し、（現在の）北極点に向けて北上し、北極点を越えてから南下するとイースター島に到達するわけだが、そのような大圏航路上、カナダ北部のジース海峡（ビクトリア島とケント半島の間。西経109度、北緯70度）のところに、カペラ、すなわちもうひとつの隠れたピラミッドが存在する可能性が示されるのである。

チベットからクリミア半島（発見済みのピラミッド7基）を通り、グラハム・ハンコックが指摘したリング・オブ・ブロッガーを経由してイースター島に達する大圏航路を想定することもできる。この（現在の）北極点を通らない大圏航路の場合は、その道筋はメキシコのピラミッドを経由しないどころか（北極点経由の場合、メキシコを南北に縦断）、グアテマラのピラミッドすら接近せずに、パナマのあたりを北北西から南南東の方向に向けて通る道筋になってしまう。

従って、クリミア半島のピラミッドは、その存在によって、「3つの恒星と地球とがエネ

ルギー粒子・波動を介して共鳴する」という知識を人類に授けてはくれるが、クリミア半島のピラミッド自身は、重要な位置（ベガ、カペラ、カノープスの位置のような）にあることを自己否定している。いずれにせよ、今後12000年をかけて、ベガが北極星の位置に、カノープスが南極星の位置に移るということは、地球の地軸が全宇宙に対して相対的に傾くだけの単純な現象で済むはずがなく、地球と全宇宙の共鳴状態に著しい変化をおよぼすことであろうから、地球上の自然環境条件を激変させるであろうことは想像に難くない。

(4) 片方の半球に集中する12基のピラミッド

ヴィタリ・ゴフ准教授の考察の中では、クリミア半島のピラミッド群のうち、一部は水がめ座に、一部はペガサスに、そしてまた一部はアンドロメダ銀河（大星雲）に対応すると論述されている。ポールシフト（これは伝統的科学的科学が証明した歳差運動とは別の、地球の自転軸のずれであるが）が起こると、実際にチベットとイースター島が極地（回転軸上）になってしまうので、イースター島でのパワー損失を補うために、当時の人々はオーストラリアにピラミッドを建設したと、ゴフ准教授は説明している。いずれにしても、イースター島とパナマ付近くバミューダとリング・オブ・ブロッガーとクリミア半島とチベットとオーストラリアを経由する大圏は、12基の基幹ピラミッドを片方の半球のみに偏在させる境界円を描くことになる。この片方の半球のうちに入らない、中国、日本などでもピラミッドが見つかっていることについて、ゴフ准教授は何も議論していないので、筆者が仮説をまじえて議論しておきたい。その前に、水がめ座、ペガサス（ペガサス）座、アンドロメダ銀河の天球における座標（[Wikipedia](#)を参照）を示しておく。

水がめ座…赤経23H 赤緯マイナス15度

ペガサス座…赤経23H 赤緯プラス20度

アンドロメダ銀河…赤経0H42M 赤緯プラス41度16分

日本（代表として東京）の位置は、東経139度34分、北緯35度4分である。チベット（ラサ）と48度くらいしか離れていないため、チベットをベガとみなした場合、水がめ座、ペガサス座、アンドロメダ銀河の位置は、東京とはるか離れた太平洋上に対応する。ムー大陸がかつて存在していたであろうと思われる範囲である。従って、仮に日本国内で見つかったピラミッドが、全地球のピラミッド合計144000基の中に入っているととしても、その格は高くなく、かつてムー大陸に存在したピラミッドの末社とでも言うべき存在となるであろう。フィリピンで「チヨコレートの丘」と呼ばれる一風変わったピラミッドが17

76基も見つかっているので、ムー大陸にあったと想像される各上のピラミッドからの支配は、日本だけでなく、フィリピンにも及んでいたと考えるほうが自然であろう。

(5) スキタイ、サルマチア(サルマタイ)のピラミッド伝承との関連

クリミア半島に約一万年も前からピラミッドが存在している、しかも地中に埋まっっているものの、多くは土砂・森林がピラミッドのシルエットを保ちながら被覆しているおかげで、たとえピラミッドを維持管理していた人々が死に絶えたとしても、その後クリミア半島に進出した人々は、その山々の形状から、この場所には多くのピラミッドが存在するという信念をもつに至ったと想像するのは、きわめて自然である。ゴフ准教授らが発掘・調査する2002年まで誰もその存在を知らなかったということは、あり得ない。よく知られているように、クリミア半島を支配した民族はめまぐるしく入れ替わった。キンメリア人、スキタイ人、ローマ人、ゴート人、フン人、ブルガール人、ハザール人、キエフ大公国、ビザンティン帝国、キプチャク人、トルコ人、ロシア人、ウクライナ共和国。筆者は、クリミア半島の地方史に関して、まとまった資料はもっていないし、仮にそのような地方史が書籍等の資料として存在していたとしても、このようにめまぐるしく変わった支配体制のせいで、ピラミッドに関する長年の調査に基づく、客観的考察に基づいた研究成果の集大成が、そういった資料の中で十分なページ数を占めているとは思われない。恐らく、時代時代の人々の心の中に、親から子へと言い伝えられる伝承として、「クリミア半島にはピラミッドがある。しかも、起源はかなり古いものらしい」という信念・意識として残ったに違いない。また、かなり古代の時期であると一般的には考えられているスキタイの時期ですら、このピラミッド群が建設された時期と比較すれば、まさに我々の生きている現代に近接した時代であると言わざるをえない。スキタイ関連の資料に絞ってピラミッドに関する伝承がないか調べてみるだけでも、過去のクリミア半島の住民にピラミッドがいかに認知されていたかについて、おぼろげなイメージを得ることが可能ではないかと思える。

筆者は、たまたまロシア語で書かれた関連書籍「СКИФЫ Строители степных пирамид」(Tamara Talbot Rice 著 2003)を持っている。本の表題を日本語に訳すと、「スキタイ ステップのピラミッドの建設者たち」であり、まさに筆者の探究にとつてびつたりの題名である。今回の考察にあたって、しばらく積ん読になっていたこの書籍を読み通してみたところ(実際には次のウェブサイトから誰でもダウンロード・自動翻訳で内容を確認することができる)、少しがっかりしたことには、この表題にもかかわらず、実際にピラミッドについて記載している箇所は2か所であった。

113 ページ：第3章 埋葬 シベリアで発見された墓（ピラミッド）の規模・埋葬品等に関する記述

203 ページ：第6章 スキタイの遺産 中欧のハルシュタット文化ケルト人の装飾品のデザインにピラミッドの模様がある。スキタイ・サルマチアの文化の影響と論述。

要は、スキタイの金細工芸などの驚異的な文化が、エジプトと同格の文化水準というイメージを植え付けたこと。その結果、ピラミッドがスキタイ文化の象徴のひとつとなったことを、この本の表題が示唆しているのではないかという見方ができる。

スキタイの時代は、現代からみてかなり昔のことであり、その実態の究明は、発掘調査やわずかに残された古代の著述（古代ギリシアの歴史家ヘロドトスなど）に頼らざるを得ない。しかも、スキタイやサルマチア（サルマタイ）の滅亡後、支配者・住民の一部が西側のヨーロッパに移動し、先住民であるケルト人やスラブ人と混血・融合したと推測されることから、中央ヨーロッパにおいては、スキタイ・サルマチアの伝承、ピラミッドに関する伝承が、混同された形で後世の住民たちに伝えられた可能性が高い。

クリミア半島のピラミッドと同様、その驚くべきスケールによって今後の本格的な究明が待たれるボスニアヘルツェゴビナのピラミッド。このボスニアのピラミッドなどの紹介を行っているウェブサイト（次に示す）に記載・投稿された記事の中に、興味深い記載があった。

<http://humansarefree.com/2013/03/groundbreaking-new-physics-surrounding.html>

オーストリアの東部、ドナウ川流域の低地オーストリアに「ケルト人のピラミッド」と呼ばれる円形のピラミッドが存在すると地元民から聞いたという話だ。この一帯はかつてローマ帝国とサルマチア帝国の境界であったところだ。今後、クリミア半島のピラミッドをさらに究明していく過程において、このような中欧のピラミッドについても、関連について焦点を当てていく必要があると思われる。

（この論文のために作成した図は、tainy.net と vitaly-gokh.narod.ru に掲載されたオリジナル図をもとに作成しました。）

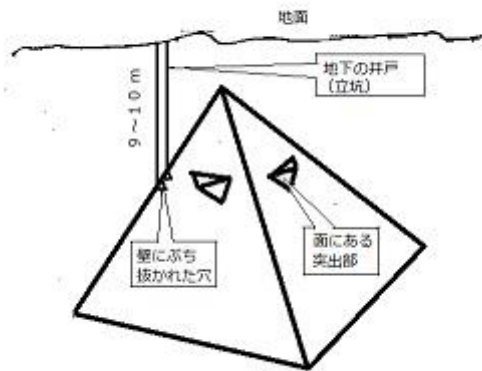


図2 地下ピラミッド No. 3

図2

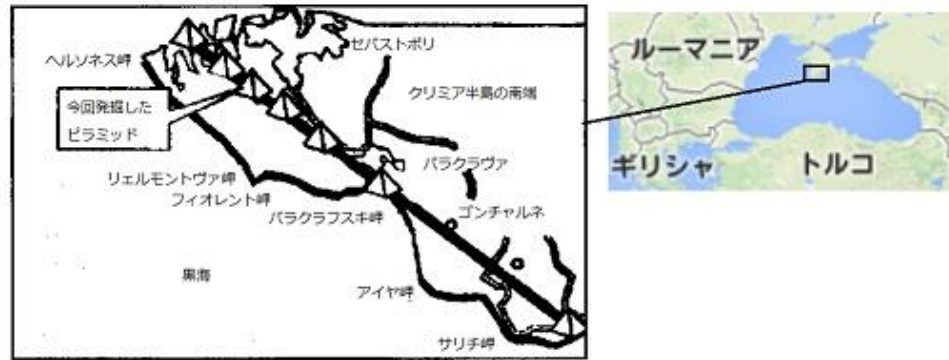


図1 クリミア半島の南端に存在するピラミッド群

図1

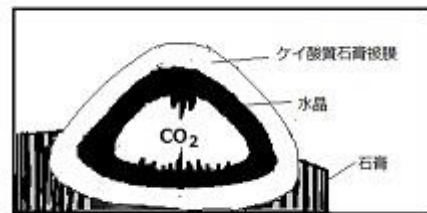


図4 ピラミッドの稜線における半導体エネルギー発生カプセル

☒
4

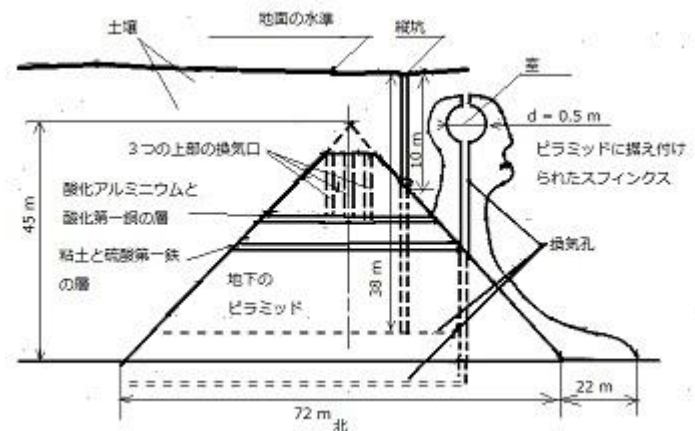


図3 スフィンクスと結合した地中ピラミッドNo 3の内部構造

☒
3

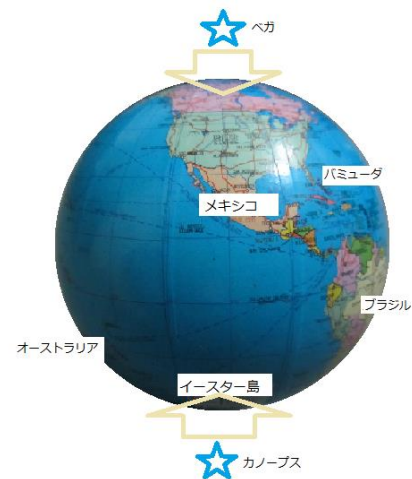


図5 ピラミッドと3つの恒星とのエネルギー相互作用